

令和4年度 ICT活用実践研究 実績報告書

所属校園	附属釧路義務教育学校		形態	■ 個人 □ 団体・グループ	
研究代表者 (申請者)	氏 名		職名	備考 (分担等)	
	更科 結希		教諭	主幹	
研究分担者 (団体・グループの場合)					
研究題目	地域の公立学校と鑑賞教材の共有をするためのICTの活用				
経 費 支 出 内 訳 <i>(事務の確認を経て提出のこと)</i>					
事項	単価 [円]	員数	金額 [円] (消費税込)	備考 (内訳・特記事項等)	
iPadホルダー	2,013	1	2,013	Ul anzi iPadホルダー	
外付けSSD 2TB	33,594		33,594	サンディスク外付けSSD2TB USB3.2 SDSSDE61-2T00-GH25	
合計			35,607	不足分は附属学校運営費より支出	

【研究実績の概要、得られた成果・効果等】 ←以下に自由記載(報告書全体で4ページ程度に)

本研究は、他地域と比較しても不足している北海道における工芸に関わる教材に着目した。いわゆる伝統工芸に関わっては、本州で作られている作品を扱うことも多く、道内における伝統工芸及び工芸に関わる実践は非常に少ない。しかし、近年の道内の木工芸はグローバルな視点での取り組みが注目され国内外で実績を作っているにも関わらず、それを教材として扱っている学校は少ない。

本研究の目的は、北海道における工芸分野の鑑賞教材となる映像資料を蓄積し、道内の公立学校と共有し題材開発を行っていくために、ICTを活用しローカルネットワークを蓄積するモデルを構築することにある。これは、北海道における免許外教科担当教諭の多い美術科の指導においても、誰もができる工芸分野の授業の確立にも有効であると考えてきた。

研究の方法としては、1、工芸分野における人材の選定 2、選定した人材の取材（ICTの活用） 3、研究団体と連携した教材開発（ICTの活用） 4、授業場面での取材対象者との連携授業及び映像資料を用いた授業の構築 5、生徒への工芸に関わる事前調査と事後調査 6、授業

を実施した教諭への事前調査と事後調査を実施して、効果の検証を図るものとする。

本研究においては、研究の方法としてあげていた1～5までは実施できたが、6に関わっては年間指導計画の関係からも、次年度での実施の見通しを計画する段階までとなった。

具体的な授業実践としては、美術科の表現領域における工芸分野の授業を開発し、地元の木材を利用したアップサイクルでの表現を行った。その中で、ものづくりに対する考えなどをお話頂くスピーカーを選定し、映像収録、そして表現の授業を終えた後に、鑑賞として実施した。

次に、その具体についてまとめていく。

1, 工芸分野における人材の選定について

工芸分野での授業を構築するにあたり、鑑賞教材としての人選を行った。工芸分野の表現を行うため、扱う素材の選定を行う際に、道東地域の素材を模索し、木材に着目した。そこで、津別町にある TSL00L（網走郡津別町活汲 2 5 8）を訪問し、中心となって取り組んでいる株式会社山上木工の山上裕一朗氏、釧路根室地域における産業技術向上のため各種事業を行っている釧路工業技術センター（釧路市鳥取南 7 丁目 2 番 23 号）の瀧本文一氏に技術的な支援を受けることにした。

2, 選定した人材の取材（ICTの活用）

実際の授業を展開する上で、木材を使いものづくりをすることの意義や日本（道東）からものづくりを発信することの意義について、山上裕一朗氏へのインタビュー（筆者）を決定した。令和 4 年 1 0 月 4 日（火）13：00より津別町 TSL00L にて実施した。質問内容は次の通りである。

○山上木工さんの会社の仕事内容

○ものづくり（製品を生み出しているという意味で）のつくり手として意識していることや大事にしていること

○MADE in JAPAN の製品づくりについて思うことやポリシー

○道東の製品が世界に向けた販売ができていく訳、よさの理由を創り手としてどのように考えているか。

○暮らしの中に位置づく工芸や製品についての考え

○木の製品をつくる過程（工程）について

木をどのように製材して、準備をしておき、製品になっていくのか

○ものづくりをしているの苦労

○治具について

○人が関わる部分と機械を取り入れたり最先端の技術を活用しながら生み出す製品の良さについて

また、資料として次の 2 点についても協力を願った。

○例として、製品 1 点を取り上げてもらい、こだわりをもって作っている箇所の紹介

○道産の木材でできた製品の紹介

この内容で、iPad とデジタルカメラでの映像収録、ワイヤレスマイクを用いて音声の収録を行った。

3, 研究団体と連携した教材開発（ICTの活用）

本研究に関しては、釧路造形教育研究会会長の佐々木幸氏（北海道教育大学）に、題材開発と授業構成、適切な教材・教具の在り方について指導をいただいた。また、この研究成果を今後地域の授業における鑑賞教材の一つとして活用できるよう、関係機関に相談をしながら取り組んだ。

4, 授業場面での取材対象者との連携授業及び映像資料を用いた授業の構築

実際の授業では、取材を行った山上氏、技術支援を頂いた瀧本文氏より素材の提供を受けている。その際にどのような性質を持ち合わせ、加工に関する知識についても学ぶことができた。授業計画において、1 単位時間の中で表現と鑑賞を位置づけることが難しかったため、インタビューした資

料（動画）は、質問毎に分割して、Adobe Express（後期課程において契約しているアプリケーション）の web ページにまとめ、授業を終えた後に教師が選択して生徒に視聴する方法で鑑賞を行った。

5、生徒への工芸に関わる事前調査と事後調査

工芸に関わる理解に関しては、多くの生徒が小学校での工作の経験の延長としてとらえていることが生徒の実態から確認できたため、工芸とはどのような分野であるのかを授業を経験しながら考えていく授業構成とした。柳宗悦は、「よき品となるには、何に役立つかをはっきり掴まねばならぬ。これが曖昧だと機能は半減するであろう」と述べていることから、生徒に自らの暮らしを想起させ、役立つものは何かを十分に検討させた上で取り組ませたいと考えた。その一つとして、概念的な問い「美しい形はどんなものであるか」を授業の前後で設定し、用途と機能、素材の双方から考えていける指導計画になるようにした。また、本研究で収録した鑑賞教材の視聴後にもテキストでの生徒の考えを集約した。

6、授業を実施した教諭への事前調査と事後調査を実施して、効果の検証を図る

授業で使用できるように、インタビューした資料は質問項目毎に、Adobe Express を活用して web 上で運用できるよう作成した。筆者の工芸の授業の際はそれを用いている。このような方法で構築することにより、距離を問わずアクセスできる環境を整えることができた。しかし、実際の公立学校における使用に関しては、本研究が年度途中からの計画であったため、ほとんどの学校において年間指導計画が既に運用されており、木材を使用した工芸分野の実践校がなく、他校での実践は叶わなかった。そのため、本校の図工・美術授業力向上セミナーで、本研究を含めた授業実践の公開を行うことで周知を図ることを優先した。次年度、同題材で取り組んでみたいとの申し出もあり、継続研究として今後運用していきたいと考えている。

本研究は、道内の教科教育における不足していた分野の指導における、新たな視点での教材開発と学校間の連携、ICTが有るからこそ実現できる授業スタイルの構築を目的としてきた。これまでの研究において、遠方校との遠隔共同授業についての実績があるため、それを土台とした新たな研究として進めていくことができると考え計画・実践を行ってきた。この遠隔地を視野にいた鑑賞教材資料の作成に関しては、他の分野でも資料を整えることができ、今後膨大な資料をストックして遠隔地同士での交流も可能であると判断している。引き続き、ICTを活用した授業の在り方を模索していきたい。